



黄金の郷

こしえるびと

つむぐストーリー vol.66

高い志のもと、日々“キラリ”と光る活動をしている人たちがいる。“黄金の郷”いわて平泉を支える、魅力溢れる“こしえるびと”のメッセージをシリーズで紹介していく。

就農を決断

北上川沿いに規則正しく並ぶ広大な水田は今、羽を休め落ち穂をついばむ白鳥たちの場所。春からはここが、小野秀明さんが汗を流すフィールドになる。

退職を決め次の仕事を考えていた時、農業を営んでいた父の勧めもあり就農することを決めた。子どもの頃から田植えや稲刈りなどを手伝っていた秀明さんにとって農業は身近な存在。父が築いた基盤もあったので「就農することに不安はなかった」と当時を振り返る。2005年の就農と同時に、岩手県立農業大学の新規就農者研修を1年間受講。農業の知識と技術の習得に励み、本格的に農業を始める準備を整えた。

助け合える仲間

秀明さんは「いちのせき米クラブ」の一員でもある。一関地方の若手農業者で組織する「4Hクラブ」に加入していた米農家と畜産農家が設立した両營資源循環型農

業研究会を、「いちのせき米クラブ」に改めて活動。安定経営のため、独自に米の販売ルート開拓に取り組み、18年にはJA全農いわて、JAいわて平泉、米穀卸売業

の津田物産（大阪市）の4者で複数年契約を締結した。さらなる販路拡大を目指し、各種フェアなどを開催してPRに力を入れる。同クラブの活動は、役割を決め、それぞれが得意な分野を担当するの
で無理がなく効率的。「自分の苦手な部分をフォローしてもらえるのは助かる。みんなで協力できるのが、いちのせき米クラブの魅力」と話す。

スマート農業の導入

作業の省力化を目指し、19年にGPS（全地球測位システム）田植え機を導入し、トラクターにはGPS自動操舵を搭載した。防除のためのドローン（小型無人飛行機）も購入し、先端技術を取り入れながら作業の省力化を図っている
と考えだ。今後、ドローンの操縦

免許取得にも挑戦し、さらなる技術の向上を目指している。

秀明さんにとって「農業の先生は父」。作業を進める上で意見がぶつかることもあるが、「父の知識と技術を吸収していきたい」と背中を追う。地元の農事組合法人アグリパーク舞川の構成員でもあり、19年4月には専務理事に就任した。「農業にチャレンジしたい若者が仲間になってくれれば」と期待している。

——自然相手の農業は、毎年栽培条件が異なり難しいゆえ、収穫の喜びはひとしお。経験を重ね一人の農業者として成長していく。

私の一品



車

愛車の「スバル サンバーディアス」。四気筒のスーパーチャージャー付で走りがスムーズだけでなく、農作業の道具が積めるなど実用性も兼ね備えた車です。

PROFILE

小野 秀明さん (43)

Hideaki Ono

一関市舞川

1977年一関市舞川生まれ。97年に短大を卒業し、一関市内の電子機器製造会社勤務を経て、2005年4月就農。農業の傍ら、県立農業大学校の新規就農者研修を受講し農業の基礎を学ぶ。19年4月から農事組合法人アグリパーク舞川専務理事。水稲20畝、小麦7畝を栽培。両親との3人暮らし。

仲間とともにつくる農業

一関市舞川 小野 秀明さん